

然り、現今英國社會の文學を歓迎するの度は非常なり。或は非難して曰はく「英國今日の社會はあまりに文學的なり」と。あまりに文學的なりとは文學熱あまりに高きをいへるなり。文學熱の高き何が故に歎すべきか。蓋し文學的といふ美稱を有する現讀者大多數の好尚は敢て高きにあらず、眞誠の文學を愛するものにあらず、作者の大多數はた理想高きにあらず、伎倆勝れたるにあらず。讀者は頻りに小説を渴望しひたすら其の量の多からんを望み、作者はこれに應じて多作し殆ど其の質を顧みず。最近二三十年間に小作家の新たに起りたるもの實に千を以て數ふ而もなほ社會の要求を滿すに起らず。彼れ等は少許の素養と拙劣の伎倆とを以て文壇にあらはれなほ裕かに其の地位を保てり。彼等は一方に於て名譽賞讃を得一方に於て報酬と禮遇とを受く。既に花を手にし又實をも得一二批評家の喝棒は食ふを意とせざる所。誰れか評家の言を恐れ寛大なる社會の好意に背き危険なる理想の作を試んとせんや。大勢是の如くなるが故に其の作は追々俗尚を標準とするに至り遂には批評の文字すらいつしか同様の程度に引き下げられんとせり。嗚呼、作家、評家、購讀者が彼のラスキン、ヂエツ、フレイの眼を以て自然を

見ラスキン、ペータルの眼を以て美術を見、アールノルド、サンブーヴの眼を以て人生を見るに至るはそも何時の時にあはるべき。

狀勢かくの如き英國の俗文學が早晩著き變化を生ぜんは豫期すべきが如し。而も二十世紀の文壇に於てよく十九世紀にありしが如きめざましき大運動の起るべきか否かは世界的大革命の二十世紀中に起るべきか否かといふ問題と聯關す。こは今容易に知らるべきことにあらず。况んや二十一世紀二十二世紀の英文壇をや。而も時は悠々たり、世波は漫々たり。一起一伏の數を重ねて光明遍照の彼岸に達すべきは吾人の期望して惑はざる所、達して此の絶對境に到らば差別は即ち平等。英國文學は英國文學にして世界文學たり。日本文學また日本文學にして世界文學たらん。

英文學史 完

62
300

印
本
三
回
三
卷
三
接
海

